

よりた座講学理心理学

「心理学講座」第3回配本附録

東京都神田局区内神保町2の24 電車通り 株式会社 中山書店



学界放談

小保内虎夫

第一回配本に掲載された大脇博士の論稿を読むとアメリカ心理学会の会員数は、一九四九年に一万人に達したとある。現在では、さらに千人位は殖えていることであろう。数十種類もある専門科目のうちで、心理学は、Ph.D.を三番目に多く出しているから、ことによつたらもっと多くなっているかも知れない。だから、大小、有名無名の心理学者から区別をたてるために distinguished Psychologistとか great P.とかいう名前が生れてくれる。學問上の貴族主義とでもいふべきか。これに較べると、わが国などは、はるかに平民的といえる。もつとも文学博士の称号を有能がつてゐるとすれば話は別だが。わが国でも、これから心理学者がますます殖える事であろう。それにしては物足りないことがある。

先日、学生の卒業送別会の席上で同僚の〇君が学生に向つて曰く、心理学界は多士済々だが、学士院賞を貰つた人がまだ一人もない事は愁しい。ついては、諸君は大いに勉強して学士院賞をもらおうようにと。〇君のいったとおり、心理学者は学士院受賞者は一人もなく、学士院会員も、松本亦太郎博士亡きあと、一人も出ていない——上野直昭氏は、美学、

美術史から抜ばれてゐる。人文科学では、わが国有数の旧い、しかも大きい学会でありながらこんなことでは困る。人がないかといえば、さに非ず、田中寛一、佐久間鼎、矢田部達郎の諸博士がズラリと並んでいる。高木貞二教授は著述か。大脇義一、桐原葆見両博士も他学科の人々に較べて業績に不足はない。学士院受賞候補もなくはない。昔、松本先生は、是非奮発してとるようにと語られたものである。学士院賞を与えた業績の一、二、三については、わたくしもその内容を知つてゐるが、松本先生のいわれた事は事実と思う。この標準からすれば、心理学界には候補がいくつかあげられる。まず第一に、田中寛一博士の東洋民族の比較研究がある。これは大きな業績でありながら、わが國の人文学界の古臭い雰囲気の為、受賞の榮誉をかちえないのでお氣の毒である。黒田亮博士の東洋心理思想の研究をここにあげても、時すでに遅く證ない事であるが、これは間違ひなく受賞に値すると思う。佐久間鼎博士の日本音声学を中心とした連の研究も、各研究の間に連絡がつきさえすれば、立派に候補に値するである。渡辺徹教授の鎌田鶴の研究も、後世の心理觀とのつながりが明らかにされ、本邦心理思想展開のあと附けがなされるならば、歴史方面的の受賞に堂々と太刀打できるものである。城戸幡太郎教授の心理学史研究は、博士とか、学士院賞とかいうものを眼中におかないところに値打があるのである。別格にした方がよいが、そういうものになる骨組だけはもつて

いるといってよいだろう。

こうあげてくると、これらは正直にいって、もう一息というところである。また、これらは心理学者の研究ではあるものの、田中博士を除けば、心理学プロバーの研究とはいはず、隣接の学問に片足つつ込んだものである。このことが、これらの研究に日の目を挙ませない原因かも知れない。だから、これからは「心理学の正道をわき目をふらずに進むにかぎる。

心理学者の平和への動向

長島貞夫

「平和」を論じ、主張するものは、共産党員が少なくとも桃色がかつっているものだということがこの頃では通念になつてゐるが、アメリカの心理学者たちは、この問題に異常な熱意と関心を示しているようだ。

一九四三年には、アメリカの「異常・社会心理学」誌 (J. Abnorm. Soc. Psychol. 1943, 38) が「平和のための心理学」を特集して、心理学が世界平和の確立のためにどのような方法と技術をもつて貢献すべきかを、また貢献しうるかを各領域の権威者に論述させている。通説するに普通の平和論にみられる概念論的な傾向に墮しておら

それにしても、心理学者の受賞されうる態勢ができることがあることが必要である。学士院会員のなかに、心理学の業績に理解と同情をもつ人がいない限り、心理学からはじままで経つても受賞者が出ないであろう。そうしてみれば、心理学者のなかから学士院会員の出る事が先決問題となつてくる。心理学会会員諸兄や心理学に厚意をもたれる方々に、この点をよく考えていただきたいものである。(教育大学教授文学博士)

ず、具体的な方策にみちでいる。誇張していえば、イデオロギィシズムでないで、「甘いもの」というかもしれないが、心理学によるイデオロギィの対立の克服ともみられる。

一九四四年七月には G·W·オールポート、R·S·クラッチ・フィールド、H·B·イングリッシュ、E·ハイデビリー・ダーリー、E·R·ヒルガード、クラインバーグ、R·リッカート、M·A·メイ、O·H·マウアード、G·マーフィー、C·C·プラット、W·S·ティラー、E·C·トールマン等の有力な心理学者一三名が「人間性と平和」という平和宣言を起草した。アメリカの心理学会会員に配布し、協力と批判を求め、会員の大多数の支持をえている。

なお、最近、「社会過程の実験的研究」

(Experiments in Social Process 1950)

といふ論文集が公刊されているが、本書の第一章として、D·G·マークス、R·リビット、カートライト、R·P·フレンチ、フェンスチング、ダニエル・カツツ等による「原爆と社会心理学」という座談会記事が収録されている。話題は、社会心理学的知見と心理学をいかにして国際緊張の解消の為に適用すべきかという点に集中されている。アメリカの心理学者といえば、過去の二つの世界大戦において、いわゆる心理戦争の遂行のために精力的な努力を傾倒しており、またある人の見方によれば、戦争がアメリカの心理学を発展せしめたともいえる。このような事実に照して最近のアメリカの有力な心理学者の動きをみると、いろいろと考えさせられるものがある。

原子力の巨大な破壊力をもつともよく知つてゐる物理学者が自己の社会的責任を痛感し、道徳的に反省し、建設の為にのみ原子力が利用されるべきことを主張しているよう、心理戦の巨大な力を熟知しているアメリカの心理学者が心理学をして戦争のための協力者たらしめてはならないと心に誓うのは当然のことともいえよう。

われわれも心理学者として社会的責任を十分に自覚し、平和への積極的な歩みを進めたものである。(東京教育大学助教授)

医学と心理学

三 浦 岱 栄

医学はもともと病める生きた具体的の人間を認識し実践の対象としているものであつて、人間が生物学的下級構造と精神的（社会的）上級構造との統一体である以上、心理学との結びつきは、解剖学や生理学との結びつきと同様の重要性をもつていてよい筈であつたのに、この自明の真理が最近ようやく真剣に認識されたといふことは、一方、心理学が長いあいだ哲学の一分子として自然科学と対立するものと考えられ、純粹思弁の枠内で終始していたこと、他方、近代医学がもっぱら動物実験を基礎にして、その解剖的、生理的、化学的变化の追求や、細菌免疫現象等の解明の上に建設せられたからである。そして僅かに精神病学といふ、医学の諸分科の中でも最も繙子扱いにされていたものを通じて、かすかな連絡がとれていたに過ぎなかつた。それが今日はどうであろうか。医学と心理学との接触は途方もなく拡がつて、単独ではその全部を見渡すことさえ骨が折れる位である。且つ、心理学との関連をもつるのは精神医学

者のみでなくして、生理学者も同様であり、少し誇張していえば医者の全体である。まず生理学者についていえば、神経系統、なまかんずく大脳の生理学の研究は必然的に心理学に導かざるをえないのであつて、条件反射学にせよ、脳波にせよ、今や生理学者と心理学者の共同研究作業の対象である。ショーシャールが「意識の生理学」を論じ、福田教授が「精神の生理学」を著わされたときも生理学と心理学との密接な交渉を行つてゐるのである。更に神経生理学者の最新の努力は数学者と協力して、記憶の量子説とかサイバネチックとかいう魅力に富んだ新科学を生み出そうとしている。

臨床医学の領域では、医学と心理学との結びつきを最も密にしたのは何といつても、フロイドによつて創始され、その門弟たちによつて発展させられた精神分析学であるが、フランスでは、今から約百三十年前に創立された精神病学会が *Société médico-psychologique* という名称の示すとく、精神医学と心理学との交渉はつねに密接であり、リボウ、ジャネ、デュード、ブロンデル等著明の心理学はいずれも同時に医師として終始病人の観察を行つてゐたのであって、今日のいわゆる臨床心理学者の先駆者であったわけである。そして彼等の努力によって次第に病的心理学あるいは精神病病理

が発達したのであるが後者は殊にフッサールの現象学から出發してヤスペースによって一應体系化されると共に、更にハイデッガー、サルトル等によつて実存哲学へと発展したが、これが精神病理学への應用はこれからといふところである。

次に医学と心理学の結びつきとして最近どくに目立つておるのは、各種の心理学的テスト乃至精神測定学の医学への應用である。ビネ・シモンによつて創始された智物語るものである。更に神経生理学者の最新の努力はモディヒケーションを経てウツクスラー、ベルヴュにまでいたり、更に性格検査法としてロルシャッハT.A.T. 等も盛に應用されている。今年の精神神経学会でも以上のテストのほかに、S.S.M.T. とか M.N.P.I. とか C.A.T. とか H.T.P. テスト、ベンダー・テスト、ゾンデイ・テスト等の報告のあるところを見れば、今や医学と心理学の接觸は空前の盛況であるといつても過言でなく、身体医学が *médico-chirurgical* の協力によってのみ完全になるとすれば、精神医学はまさに *médico-psychologique* の協力の場でなければならぬのである。最後に、精神身体医学の渗透は今や心理学を単に精神医学者の専有物としてではなく、すべての臨床医学にとって一應習得すべき学科としたことを指摘しておこう。（慶大教授医学博士）

読者ページ

大変よい企画だと思う。ことに生理と心理の関係や個人と社会問題との関連性が実際によく論述されている点など我々の多いに参考とするに足る書物だと思います。

長野県高井郡 小学校長 吉池 主計

各部門の基本的な概念および考え方の把握を目標としてこの講座の愛読をつづけようと思っています。私の希望としては個々の細かい内容の敍述よりも心理学上思想や考え方の方といふような問題の解説などに今後期待をかけています。

東京都文京区 会社員 西村 弘保

医学者として心理学方面の適当な参考書が欲しいと思っていた矢先に、この講座の発刊を見たことは満足にえません。

福岡市下大楠町 医師病院長 青木 栄雄

新潟市寄居町 公務員 浜田 秀

待望の本が出たという感じです。商学部に席を置く私はこの講座によって産業心理学の研究をつづけることのできるのは大きなか喜びです。

東京都板橋区 学生 米山 正儀
非専門家の我々も興味深くよめる広汎な心理学書として今後の出版の発展を祈ります。分冊にしたことは読みやすく、紙質のよきも好感がもてます。

東京都江戸川区 会社員 中村 知祐
心理学講座のような本格的な講座を毎月一回づつ配本できますことは著者の諸先生方の御努力と読者のみな様の御鞭撻の賜物と存じます。さいわいに回を重ねることに各方面の反響をよび、共感や激励や忠告のお便りを編集部によせていただき、私共一同よろこびにえません。

さて五月三日から五日まで日本心理学会が広島大学で盛大に開催されていますが、本講座の著者の先生方も、それぞれの分野で御活躍をしていらっしゃることと思います。

次回の月報には今度の学会の模様などぜひ読者のみな様におつたえしたいものと思つております。(心理学講座編集部)

心理学講座

|| 第四回配本 || 内容

学習理論

人間における条件反射
教育大教授 文学博士

小保田 虎夫他

心理学論

医学博士

吉 武 弼 正

学習指導

大助 教授
茶水女子大学助教授

吉 田 昇

社会態度

武藏大講師
横濱大教授

島 田 一 男

世論

東大助教授
横濱大教授

池 内 一

文化発達—史観

国立横濱大教授
文学博士

宮 島

事故防止

東大助教授
國立横濱大教授

鶴 田 正 一

人事管理

廣島大教授
医学博士

林 兼子

錐体路系外路系

廣島大教授
医学博士

鶴 田 正 一

小脳の動き

兵庫医大教授
医学博士

須 田 勇 宙